

日本庭園の主役はコケ？

コケなくして日本庭園を語ることもなけれ

梅雨の時期、コケはもつとも美しい姿を見せる。

それによって日本庭園もまた、真骨頂を現出させるだろう。

コケと日本庭園の関係やいかに？

作庭家の重森千青さんに聞いた。

作庭家

重森千青

●しげもり・ちさを 1958年東京都生まれ。中央大学文学部卒業。重森庭園設計研究室代表。作庭家・庭園研究家。庭園作品に『松尾大社瑞翔殿庭園』（京都府）、『長保寺・寂光の庭』（和歌山県）など。

コケがいちばん適している

——日本庭園を作る場合、コケの存在はあらかじめ想定されているものなんですか？

最初から想定していますね。コケ自体を人工的に植えるんですよ。たとえば、枯山水の庭園を作るときでも、築山を作って、そこにびっしり

とコケを植えたりする。

新しく作った庭園でも「コケがきれいですね」と言われることがありますが、芝生と同じで、板状のコケを貼ったばかりだからです。板状のコケを栽培しているコケ製造会社があり、オーダーすると、芝生と同じように一枚が三十センチ四方のものをリング箱のようなものに入れて送ってくれます。一箱がだいたい一平

いって、しっかりと土を固めてしまおうと、築山が硬い感じになってしまふ。そこで自然の風景にいちばん近い感じに見えるものは何かといえば、コケしかない。

日本庭園は、大自然を凝縮してミニチュアライズしたものですから、土を盛り上げただけの築山もあたかも自然物のように見えないといけません。そこに石をあしらえば、なだらかな築山を急峻な山に見せることができます。そうした演出が、庭をより精巧なものにしますし、力強さも増してくるのです。

日本庭園の主なテーマとして蓬萊神思想などがあります。そういう意味で、普遍的なものとして石が使われます。石は一度据えたら姿形が変わりませんし、なだらかなコケの山に急峻さを出す石があるとすると不思議なことに、おいそれとは近づ

けない雰囲気をもった山に見えてくる。その石の麓にある山が、自然界にある、ごく普通の山に見えてくるようにするためには、コケがいちばん適しているんですね。

——いまの日本庭園のルーツは、室町時代に作られたものなのですか。

『日本書紀』にも、日本庭園が作られていたという記述がありますが、古代の庭は現代には一つも残っていません。以前は、『日本書紀』の記述は事実に基づいたものではなく、伝説的なものだろうと長らくいわれてきたのですが、近年に遺跡発掘の精度が上がって、いろんなものが発見されるようになって、『日本書紀』の記述はかなり正確だということがわかってきています。最新の発掘によって、『日本書紀』が記述した庭園ではないかという遺跡がいくつか見つかっているんですよ。

——古代の庭はコケの有無はわからないにしても、時代が下ってきてからの庭は、コケは想定されているのですか。

庭が作られるようになった最初期の段階では、おそらくコケは植えてなかったと思います。庭園文化というものは最初、中国大陸や朝鮮半島を経由して入ってきて、そのころは渡来系の人たちの指導のもとに作っていたようですが、奈良時代にはすでに、日本人独自の、日本の気候風土に合わせた作り方が確立している。そうした庭園が作られていた場所は、平城京があった大和地方、平安京となつてからは京都なんですね。

奈良や京都、一時期都（近江京）があった滋賀などは、東京と違って山が多くありますし、湿気も多いので、コケの生育にはとても適したところなんです。当初、そうした庭には、